



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

動物の錯視

トリの眼から考える認知の進化

中村哲之

錯視とは、物体の見た目（主観的性質）と実際の大きさ（物理的性質）との間に大きな乖離が生じる現象です。例えば、ヒトには大きな円に囲まれた円は小さく見え、逆に小さな円に囲まれた円は大きく見えます。本書では、鳥類（ハト、ニワトリ）が様々な錯視図形をどのように見ているのかを調べました。その結果、ヒトと鳥類で同じように生じる錯視がある一方で、驚くべきことに生じ方が全く異なる錯視があることも分かりました。錯視は、ヒトを含めた動物が「ありのまま」の世界を見

ているのではなく、目や脳によって「解釈された」世界を見ているために生じるものです。つまり、ヒトと鳥類で錯視の生じ方が異なるということは、同じ物体を見ている、その情報処理の仕方に違いがあることを意味します。

我々は、自身の見ている世界が唯一絶対のものだと思いがちですが、実はそうではないことを比較認知研究は教えてくれます。ヒトにはヒトの、ハトにはハトの、ニワトリにはニワトリの見方があり、自分が正しく相手は間違っているというわけではないのです。



著 中村哲之
発行 京都大学学術出版会
A5判 / 192頁
定価 本体 2,400円 + 税
発行年月 2013年3月

なかむら のりゆき
千葉大学先進科学センター特任助教。専門は比較認知科学。論文は「Do birds (pigeons and bantams) know how confident they are of their perceptual decisions?」（共著, *Animal Cognition*）, 「Pigeons perceive the Ebbinghaus-Titchener circles as an assimilation illusion.」（共著, *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes*）など。

現代心理学

行動から見る心の探求

伊藤正人

本書は、入門的教科書として、行動分析学の立場より、哲学的基礎から社会的行動、さらに臨床的問題まで、心理学の主要な領域を概説したものである。現代心理学というタイトルは、できるだけ最近の研究成果を取り入れたいという編者らの思いを、また、副題は、内的過程ではなく、行動から「心」の問題に接近しようとする編者らの立場を表している。このような立場と、例えば、内的過程を想定する認知心理学の研究領域である「記憶」の章は、かなりの乖離があるように見えるかもしれない。

しかし、記憶を過去経験（行動とその結果）による、現在の行動への影響としてとらえることにより、記憶の研究を想起という行動から、記憶から保持への過程を研究する分野として位置づけることができる。また、本書では、多くの章で動物の研究を引用しているが、特に「記憶」の章では、こうした接近法がヒトと動物の記憶の問題を統一的に理解することに寄与できると考えている。こうした考え方が少しでも理解されるなら、編者らの思いが達成されたことになろう。



編著 伊藤正人
発行 昭和堂
A5判 / 272頁
定価 本体 2,500円 + 税
発行年月 2013年4月

いとう まさと
大阪市立大学名誉教授。専門は学習心理学、行動分析学。著書はほかに『行動と学習の心理学：日常生活を理解する』, 『心理学研究法入門：行動研究のための研究計画とデータ解析』（いずれも昭和堂）, 『意思決定と経済の心理学』（分担執筆, 朝倉書店）, 『学習2 その展開（現代基礎心理学6）』（分担執筆, 東京大学出版会）など。



共編 根ヶ山光一・外山紀子・
河原紀子
発行 東京大学出版会
A5判 / 314頁
定価 本体 3,500円＋税
発行年月 2013年4月

ねがやま こういち
早稲田大学人間科学学術院教授。専門は発達行動学。著書はほかに『アロマザリングの島の子どもたち：多良岡島子別れフィールドノート』（新曜社）、『子別れとしての子育て』（NHK出版）、『発達行動学の視座：〈個〉の自立発達の人間科学的探究』（金子書房）、『発達の基盤：身体、認知、情動』（編著、新曜社）など。

子どもと食

食育を超える

根ヶ山光一

食が子どもの基本的な生活習慣に関わるということで、正しい食を身につけさせようという考え方がある。その一方で、子どもの食には大人の思惑と異なる要求的で自己主張的な側面もあり、それは子どもの動物的な逞しさの源泉でもある。また、たとえば摂乳によって排卵がコントロールされるなど、子どもの食によって大人が導かれることもある。大人社会の価値観に基づいて用意された食環境が、子どもの本性と不整合を起こすということも珍しくない。さらに、大人に見せない子どもの自律的な食も存在する。子

どもの食は、こういう多様性の中で行われているのである。

「アメとムチ」といわれるように、食は行動をコントロールする有力な手段である。しかしこのような子どもの食の多様性や能動性を理解しないで食育を行うと、かえって子どもを導き損ね彼らを阻害することにもなりかねない。本書はそういう問題意識に基づいて、子どもの食における多様な実像を把握しようとして編まれたものである。大人と子どもの「共生」のあり方に関心があるすべての方に手にしていただきたい。



著 溝川藍
発行 ナカニシヤ出版
A5判 / 205頁
定価 本体 5,700円＋税
発行年月 2013年2月

みぞかわ あい
明治学院大学心理学部助教。専門は認知発達心理学。著書はほかに『感情科学』（分担執筆、京都大学学術出版会）、論文は「Relationships between maternal emotional expressiveness and children's sensitivity to teacher criticism」(*Frontiers in Psychology*)、「Young children's understanding of pretend crying: The effect of context」(*British Journal of Developmental Psychology*)など。

幼児期・児童期の感情表出の調整と他者の心の理解

対人コミュニケーションの基礎の発達

溝川 藍

子どもっておもしろい！なぜこんな行動をするんだろう？—本書には、筆者が子どもの心の発達に惹きつけられ、6年間にわたって取り組んできた「嘘泣き」研究の成果が盛り込まれています。はじめは、学部生の頃に、嘘泣きをする母親を真剣になぐさめる3歳児と出会い、「本当に泣いていると思っているのだろうか」と疑問を抱いたことでした。これまでの発達心理学の研究において、偽りのポジティブ感情表出（期待外れの贈り物をもって笑顔を見せる等）の理解の発達は扱われてきました

が、嘘泣きのように「あえてネガティブ感情を表出する」ことを、子どもがいつ・どのように理解するようになるのかを検証した研究はありませんでした。そのため筆者は「偽りのネガティブ感情」の中でも特に「嘘泣き」の理解の発達に力点を置き、実験研究を通して、その理解を支える認知的側面の発達の様相を明らかにしようとして試みています。子どもの感情・心の理解にご関心をお持ちの方に、またこれから発達研究を始めてみようという方にもぜひご一読いただきたいと思います。